第5講 古文 説話・随筆の読み方と知識

主語・会話文・敬語／助動詞と品詞分解／文学史・旧国名・月の異名

読み方のコツ 10分 | 例題 15分 | 練習（本文1題） 40分 | 確認テスト 10分

要点1 主語は「敬語」と「つなぎのことば」で決める／助動詞は「意味」と「つき方」で見分ける

一 **主語（だれが）を見つける** ①登場人物に印をつけ、動作の横に「だれが」を書く。②「〜て」でつながる動作は**同じ人**が多い。「〜ば」「〜に」「〜ど」のあとは**主語が変わりやすい**。③会話文の話し手は、あとの「と言ふ」「と申す」「とて」の主語。

二 **会話文の「　」** 会話は「と」「とて」「など」の前で終わる。かぎかっこがないときは、「と言ふ」から前へたどって始まりをさがす。心の中のことば（〜と思ふ）も同じ。

三 **敬語で人物をしぼる** **尊敬語**（給ふ・のたまふ・おはす・思す・召す）＝動作をする人を高める。**謙譲語**（申す・奉る・参る・聞こゆ）＝動作を受ける人を高める。**丁寧語**（侍り・候ふ）＝聞き手に丁寧に言う。「せ給ふ」「させ給ふ」（二重の尊敬）は帝・中宮など**いちばん身分の高い人**の動作。敬語のない動作は、書き手自身のことが多い。

四 **品詞分解の見方** ①文節に区切る。②自立語（名詞・動詞・形容詞・副詞など）と付属語（助詞・助動詞）に分ける。③動詞などのあとの「ず・む・べし・けり・ぬ・たり」は**助動詞**、「は・を・に・も・て・ば」は**助詞**。④「え〜ず（〜できない）」の「え」は**副詞**。

助動詞	おもな意味（訳）	見分けのめやす
べし	推量（〜だろう）・意志（〜しよう） 当然（〜はずだ）・命令（〜せよ）・可能	主語が「わたし」→意志 相手にさせる→命令
む（ん）	推量（〜だろう）・意志（〜しよう）	主語が「わたし」→意志
ず	打消（〜ない）	未然形につく。 ざり・ぬ・ね と形が変わる
けり	過去（〜た）・詠嘆（〜だなあ）	会話・和歌の「〜なりけり」 は詠嘆が多い
ぬ	完了（〜た・〜てしまった）	連用形につく（咲き**ぬ**） ※未然形＋ぬ（咲か**ぬ**）は打消「ず」
たり	完了（〜た）・存続（〜ている）	連用形につく

問一　次の敬語のうち、尊敬語を一つ選びなさい。　あ　申す　い　参る　う　のたまふ　え　侍り　お　奉る　［　　］

問二　『方丈記』の書き出し「ゆく河の流れは絶えずして」の傍線部の品詞分解として最も適当なものを一つ選びなさい。　［　　］

あ　名詞―助詞―動詞―助詞―助詞　い　名詞―助動詞―動詞―助動詞―助詞　う　動詞―助詞―動詞―助動詞―助詞

え　名詞―助詞―動詞―助動詞―助詞　お　名詞―助詞―形容詞―助動詞―助詞

問一　鎌倉時代に成立した説話集を二つ選びなさい。　あ　今昔物語集　い　十訓抄　う　方丈記　え　発心集　お　平家物語

問二　（1）「長月」は何月か、漢数字で答えなさい。

（2）「近江」は今の何県か、答えなさい。

要点2　文学史は「ジャンル・時代・作者」の三つをセットで覚える

作品	ジャンル	時代	作者・編者
古事記	歴史書	奈良	太安万侶（編）
万葉集	**和歌集**	奈良	大伴家持ら（編）
竹取物語	物語	平安	不明
伊勢物語	歌物語	平安	不明
古今和歌集	**和歌集**	平安	紀貫之ら（編）
土佐日記	日記	平安	紀貫之
枕草子	**随筆**	平安	清少納言
源氏物語	物語	平安	紫式部
更級日記	日記	平安	菅原孝標女
今昔物語集	**説話集**	平安の終わり	不明
方丈記	**随筆**	鎌倉	鴨長明
発心集	**説話集**	鎌倉	鴨長明
新古今和歌集	**和歌集**	鎌倉	藤原定家ら（編）
宇治拾遺物語	**説話集**	鎌倉	不明
十訓抄	**説話集**	鎌倉	不明
平家物語	軍記物語	鎌倉	不明
古今著聞集	**説話集**	鎌倉	橘成季
沙石集	**説話集**	鎌倉	無住
徒然草	**随筆**	鎌倉の終わり	兼好法師
おくのほそ道	紀行文	江戸	松尾芭蕉

旧国名（近畿を中心に）	
山城	京都府の南部
摂津	大阪府の北部・兵庫県の南東部
河内	大阪府の東部
和泉	大阪府の南部
大和	奈良県
紀伊	和歌山県・三重県の南部
伊賀・伊勢・志摩	三重県
近江	滋賀県
播磨・但馬・淡路	兵庫県
越前・若狭	福井県
尾張・三河	愛知県
武蔵	東京都・埼玉県など
陸奥・出羽	東北地方
土佐	高知県
筑前・筑後	福岡県（「筑紫」は九州）
薩摩	鹿児島県

季節	月の異名（旧暦）		
春	一月 睦月（むつき）	二月 如月（きさらぎ）	三月 弥生（やよい）
夏	四月 卯月（うづき）	五月 皐月（さつき）	六月 水無月（みなづき）
秋	七月 文月（ふみづき）	八月 葉月（はづき）	九月 長月（ながつき）
冬	十月 神無月（かんなづき）	十一月 霜月（しもつき）	十二月 師走（しわす）

一　**入試の文学史**　毎年出る。「同じジャンルの作品を二つ選ぶ」「同じ時代の作品を選ぶ」「作者名を漢字で書く」の形。時代は**奈良→平安→鎌倉→室町→江戸**の順。作品名に「物語」とついても、『宇治拾遺物語』は説話集、『平家物語』は軍記物語。三大随筆は『枕草子』『方丈記』『徒然草』。**鴨長明**は随筆『方丈記』と説話集『発心集』の両方を書いた。

二　**旧国名・月の異名**　本文に出た国名・月の名から、今の府県・何月かを答える（入試では「伊賀」が今の何県かを問う問題が出た）。旧暦では一～三月が春、四～六月が夏、七～九月が秋、十～十二月が冬。

例題　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

次の文章は、作者（清少納言）が仕えた中宮（定子）のもとに、中宮の弟の中納言（藤原隆家）が参上した場面である。

中納言殿参り給ひて、御扇（みあふぎ）たてまつらせ給ふに（中宮に扇を差し上げなさるときに）、「隆家（たかいへ）こそいみじき骨は得て侍れ。それを張らせて参らせむとするに、おぼろげの紙（ありふれた紙）はえ張るまじければ、もとめ侍るなり」と申し給ふ。「いかやうにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「すべていみじう侍り。『更にまだ見ぬ骨のさまなり』となむ人々申す。まことにかばかりのは見えざりつ」と、言高く（こと）（声高に）の給へば、「さては扇のにはあらで、海月（くらげ）（骨のない生き物）のななり」と①聞ゆれば、②「これはこれ隆家が言にして（こと）む」とて③笑ひ給ふ。かやうの事こそは、かたはらいたき事（聞き苦しいこと）のうちに入れつべけれど、「ひとつな落しそ（一つも書きもらすな）」といへば、いかがはせむ。

（『枕草子』による）

例題の問いと解き方

問い　（1）傍線部①「聞ゆれば」の主語を、あ　中納言　い　中宮　う　作者　から選びなさい。（2）傍線部②はどういう意味か。

解き方　会話文を「　」でくくり、**敬語で話し手をしぼる**。「申し給ふ」（謙譲＋尊敬）＝中納言が中宮に申し上げる。「問ひ聞えさせ給へ」（「させ給ふ」は二重の尊敬）＝中宮がおたずねになる。「言高くの給へ」（尊敬）＝中納言。①「聞ゆ」は「言ふ」の**謙譲語だけ**で尊敬語がない＝書き手（作者）自身の動作。「扇の骨ではなく、くらげの骨のようですね」と、見たことのない骨＝骨のないくらげの骨、としゃれを言った。②「してむ」＝「し（する）＋て（完了「つ」）＋む（意志）」。**答え**　（1）う　（2）これは隆家が言ったことにしてしまおう。（作者のしゃれを自分の手がらにしようという冗談）

問一　傍線部③「笑ひ給ふ」の主語として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。　あ　中納言　い　中宮　う　作者　え　人々

□

問二　最後の一文「かやうの事こそは、……いかがはせむ。」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。□

あ　このような中納言の自慢話は、聞き苦しいので書きたくないけれど、中納言が書いてくれとたのむので、しかたなく書いたということ。

い　このような自分のしゃれは、たいへんすばらしいものなので、人々に一つも聞きもらさないでほしいと作者が願っているということ。

う　このような自分の自慢めいた話は、聞き苦しいものに入れるべきだけれど、人々が一つも書きもらすなと言うので、しかたなく書いたということ。

え　このような宮中での話は、外にもらしてはいけないものなので、どんなに人々にたのまれても、書くことはできないということ。

お　このような失敗の話ははずかしいので知られたくないけれど、中宮が書くように命じたので、書かずにはいられなかったということ。

練習　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（入試の形）

八幡別当（石清水八幡宮の長官）頼清（よりきよ）が遠流（「遠類」と同じで、遠い親類）にて、永秀法師（えいしう）といふものありけり。家、貧しくて、心、すけりける（風流の道に心を打ちこんでいた）。夜昼、笛を吹くより外のことなし。かしがましさ（やかましさ）に耐へぬ隣家（となりいへ）、㋐やうやう立ち去りて、後には人もなくなりにけれど、①さらにいたまず。

頼清、聞きあはれみて、使ひやりて、②「などかは、何ごとものたまはせぬ。便りあらんこと（用のあること）は、憚（はばか）らずのたまはせよ」と言はせたりければ、「返す返す、かしこまり侍り（まことに恐れ多く存じます）。深く望み申すべきこと侍り。すみやかに参りて申し侍るべし」と言ふ。

あるかた夕暮れ（ある日の夕方近く）に出で来たれり（永秀が頼清のもとにやって来た）。③「疑ひなく、所知（領地）など望むべきなめり」と思ひて、これを尋ぬれば、「筑紫に御領（ご領地）多く侍れば、漢竹の笛のこと（中国から渡ってきた竹で作った笛のこと）、よろしく侍らん（たやすいでしょう）。一つ召して給はらん（取り寄せてくださいませんか）。これ、身に取りて④極まれる望みにて侍れど、あやしの身（身分の低い者）には得がたき物にて、⑤年ごろえまうけ侍らず」と言ふ。

思ひの外に、いと㋑あはれに覚えて、「いといと安きことにこそ。すみやかに尋ねて、奉るべし。その外、御用ならんことは侍らずや」と言へば、「御志はかしこまり侍り。されど、それはこと欠け侍らず（不足はございません）」と言ふ。

「げに、数寄者（すきもの）（風流の道に打ちこむ人）にこそ」と、⑥あはれにありがたく覚えて、笛、急ぎ尋ねつつ送りけり。後には、笛の功（修練）積りて、並びなき上手になりけり。

（『発心集』による。一部省略）

問一　傍線部①「さらにいたまず」の解釈として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　ますます悲しむ　　い　二度とつらいとは言わない　　う　さらに笛の練習にはげむ　　え　少しも気にしない　　お　少しも体をいためない　［　　］

問二　傍線部②「などかは、何ごとものたまはせぬ」の解釈として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　どうして何も言わせてくれないのか　　い　どうして何もおっしゃらないのですか　　う　何ごともおっしゃってはなりません

え　どうして何も聞いてくださらないのですか　　お　なんとかして何でも話させてください　［　　］

問三　傍線部③の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　永秀が、頼清ほどの身分の人なら、自分の望みをかなえて、きっと領地などを与えてくれるにちがいないと期待している。
い　頼清が、貧しい暮らしをしている永秀は、きっと領地などの生活の助けになるものを望むのだろうと考えている。
う　頼清が、笛の名人である永秀は欲のない人なので、領地などは決して望まないはずだと信じて疑わないでいる。
え　永秀が、自分は身分の低い者なので、頼清に領地などを望むことは決してあってはならないと考えている。
お　頼清の使いが、貧しい永秀はきっと領地をほしがっているにちがいないと、まわりの人たちにうわさしている。

問四　傍線部④「極まれる望み」とあるが、永秀が望んだものは何か。本文中から四字で抜き出しなさい。

問五　傍線部⑥とあるが、頼清がこのように思ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　永秀が、身分の低い自分が望みを言うのは恐れ多いと遠慮して何も望まなかったので、身分の低い者にしては礼儀正しいと感心したから。
い　永秀が、笛を受け取るとすぐに並ぶ者のない上手になったので、笛の道に打ちこむ心の深さと、生まれつきの才能におどろいたから。
う　永秀が、本当は筑紫の領地がほしいのに、それを笛の名を借りて遠回しにたのんだので、身分の高い人へのたのみ方のたくみさに感心したから。
え　永秀が、着る物にも食べる物にも困っているのに、笛ばかり吹いて少しも暮らしを立てようとしないので、たいへんかわいそうに思ったから。
お　永秀が、領地や暮らしの助けを求めず、ただ笛を一つ望んだだけで、ほかには何もいらないと言ったので、笛の道に打ちこむ心の深さに感心したから。

問六　二重傍線部㋐「やうやう」・㋑「あはれ」を現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで書きなさい。

㋐

㋑

問七　本文中の「筑紫」は今のどの地方か。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　東北地方　い　関東地方　う　近畿地方　え　四国地方　お　九州地方

問八　次のA～Cの「べし（べき）」の意味の組み合わせとして最も適当なものを、あとの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A　すみやかに参りて申し侍るべし（永秀のことば）　B　所知など望むべきなめり（頼清の思い）

C　すみやかに尋ねて、奉るべし（頼清のことば）

あ　A推量　B意志　C命令　　い　A意志　B当然　C命令　　う　A意志　B推量　C意志

え　A命令　B推量　C意志　　お　A当然　B推量　C推量　［　　］

問九　傍線部⑤「年ごろえまうけ侍らず」を品詞分解したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　名詞―助詞―動詞―動詞―助動詞　い　名詞―副詞―動詞―助動詞―助動詞　う　副詞―副詞―動詞―動詞―助動詞

え　名詞―副詞―動詞―助詞―助動詞　お　名詞―副詞―動詞―動詞―助動詞　［　　］

問十　次のⅠ～Ⅳについて、本文の内容と合っているものには「あ」、合っていないものには「い」と答えなさい。

Ⅰ　永秀が夜も昼も笛を吹いていたので、となりの家の人々は、やかましさにたえきれず、しだいに出ていってしまった。

Ⅱ　頼清は、貧しい永秀のことを聞いて気の毒に思い、自分から使いを送って、用があれば遠慮なく言うように伝えた。

Ⅲ　永秀は、頼清に笛を取り寄せてもらうだけでなく、着る物や食べ物の世話もしてほしいとたのんだ。

Ⅳ　永秀は、頼清から笛を送られる前から、すでに並ぶ者のない笛の名人として知られていた。

Ⅰ［　　］　Ⅱ［　　］　Ⅲ［　　］　Ⅳ［　　］

問十一　『発心集』は、鎌倉時代の初めに成立した仏教の説話集で、作者は随筆『方丈記』の作者と同じである。これについて、次の（1）・（2）に答えなさい。

（1）作者の名前を漢字で答えなさい。［　　］

（2）『発心集』と同じジャンルの作品を、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。［　　］［　　］

あ　枕草子　　い　宇治拾遺物語　　う　平家物語　　え　古今著聞集　　お　土佐日記　　か　源氏物語

確認テスト（10分・100点）　次の問いに答えなさい。

問一　次の（1）～（4）を現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで書きなさい。（各5点）

（1）をかし［　　］　（2）まゐる［　　］　（3）てうど［　　］　（4）いふやう［　　］

問二　次の月の異名は何月か。漢数字で答えなさい。（各5点）

（1）弥生［　　］　（2）水無月［　　］　（3）神無月［　　］

問三　次の旧国名は今の何府県にあたるか。一つずつ選びなさい。（各5点）　（1）河内［　　］　（2）大和［　　］

あ　大阪府　　い　京都府　　う　奈良県　　え　和歌山県　　お　三重県

問四　次の「ぬ」のうち、打消の意味のものを一つ選びなさい。（10点）　あ　花咲きぬ。　　い　花咲かぬ里。　　う　雨降りぬ。　　え　日入りぬ。［　　］

問五　空一面の黒い雲を見て言った「今宵は雨降るべし。」の「べし」の意味を一つ選びなさい。（10点）

あ　意志　　い　命令　　う　推量　　え　可能　　お　打消［　　］

問六　『枕草子』の作者の名前を漢字で答えなさい。（5点）［　　］

問七　『発心集』と同じ鎌倉時代に成立した作品を一つ選びなさい。（10点）　あ　平家物語　　い　竹取物語　　う　源氏物語　　え　おくのほそ道［　　］

問八　「げに」の意味を一つ選びなさい。（10点）　あ　下品に　　い　すぐに　　う　しだいに　　え　本当に［　　］

問九　次の敬語のうち、謙譲語を一つ選びなさい。（10点）　あ　奉る　　い　給ふ　　う　おはす　　え　思す　　お　侍り［　　］

入試にチャレンジ　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（練習と同じ作品の別の話）

中ごろ（少し昔）、市正（役所の長官）時光といふ笙（雅楽の管楽器）吹きありけり。茂光といふ篳篥（雅楽の管楽器）師と囲碁を打ちて、同じ声に（声をそろえて）裏頭楽（雅楽の曲の名）を唱歌（楽器のふしを口で歌う）にしけるが、おもしろく覚えけるほどに、内（帝）より、とみのこと（急な用事）にて、時光を召しけり。御使、至りてこのよしを言ふに、①いかにも耳にも聞き入れず、ただもろともにゆるぎあひて（体をゆらしあって）、ともかくも申さざりければ、御使、帰り参りて、このよしをありのままにぞ申す。「いかなる御いましめ（おとがめ）かあらん」と思ふほどに、「いとあはれなる者どもかな。さほどに楽にめでて、何ごとも忘るばかり思ふらんこそ、いとやむごとなけれ（尊いことだ）。②王位は口惜しきものなりけり。行きてもａえ聞かぬこと」とて、涙ぐみ給へりければ、③思ひの外になむありけり。これらを思へば、この世のこと思ひ捨てむ（世を捨てて仏道に入る）ことも、数寄（風流の道に打ちこむこと）はことに便り（手がかり）となりｂぬべし。

（『発心集』による）

問一　傍線部①のときの時光たちの様子として最も適当なものを一つ選びなさい。［　　］

あ　囲碁の勝負に夢中になっていたので、使いの声が少しも聞こえず、帝からの急な呼び出しがあったことにまったく気づかなかった。

い　帝からの急な呼び出しに応じるのがいやで、わざと聞こえないふりをし、使いが帰るまで二人で楽のふしを歌い続けていた。

う　使いのことばは聞こえていたが、帝の呼び出しよりも囲碁の勝負をつけるほうが大切だと考えて、返事をしないでいた。

え　囲碁を打ちながら、二人で声をそろえて楽のふしを歌うのがおもしろく、楽に夢中になって、帝からの急な呼び出しにも耳を貸さなかった。

お　帝からの急な呼び出しの知らせにおどろき、何かおとがめがあるのではないかと、二人ともからだがふるえて何も言えなかった。

問二　次の（1）～（3）の主語を一つずつ選びなさい（同じ記号を使ってもよい）。

（1）至りてこのよしを言ふ　（2）ともかくも申さざりければ　（3）涙ぐみ給へりければ

あ　時光たち　い　御使　う　帝　え　まわりの人々　（1）［　　］（2）［　　］（3）［　　］

問三　傍線部②とあるが、帝がこう言ったのはなぜか。最も適当なものを一つ選びなさい。

あ　帝という高い位にあっても、時光たちを宮中に呼び出すことさえできず、命令にしたがわせる力がないことがわかったから。
い　帝という高い位にあると、自分から時光たちのところへ出かけて行って、心ゆくまで二人の楽を聞くこともできないから。
う　帝という高い位にあるために、時光たちのように楽に打ちこむ時間がなく、自分の笙や篳篥の腕前が少しも上がらないから。
え　帝の呼び出しよりも楽を大切にする者がいるのを知り、帝の位が世の人々にそれほどうやまわれていないとわかったから。
お　帝という高い位にあると、何ごとも人にまかせきりになり、時光たちのような楽の上手を自分で見つけることができないから。

問四　傍線部③「思ひの外になむありけり」とあるが、何が「思ひの外」だったのか。最も適当なものを一つ選びなさい。

あ　二人は、きっと帝にほめられるだろうと思っていたのに、帝は自分の位を残念に思うばかりで、二人のことには少しもふれなかったこと。
い　使いは、二人を連れて帰れなかったので、きっと帝にしかられるだろうと思っていたのに、帝が使いをとがめずに涙を流したこと。
う　帝は、呼び出しに応じなかった二人を罰しようと考えていたのに、使いが二人をかばったので、二人を許さなければならなかったこと。
え　帝の急な呼び出しに、二人はすぐに応じるだろうと思われていたのに、二人は囲碁を打ち続けて、とうとう宮中へ行かなかったこと。
お　帝の呼び出しに応じなかった二人は、きっとおとがめを受けるだろうと思われていたのに、帝は二人をほめ、涙ぐみさえなさったこと。

問五　二重傍線部ａ「え聞かぬ」・ｂ「ぬべし」の「ぬ」の意味の組み合わせとして最も適当なものを一つ選びなさい。

あ　ａ完了　ｂ打消　　い　ａ完了　ｂ完了　　う　ａ打消　ｂ完了　　え　ａ打消　ｂ打消　　お　ａ打消　ｂ推量

問六　練習の文章（永秀法師の話）とこの文章の両方から読み取れる「数寄者」の姿として最も適当なものを一つ選びなさい。

あ　楽器や楽の腕前を帝や身分の高い人に認めてもらい、ほうびや高い地位を手に入れることを目ざして、夜も昼もはげみ続ける姿。
い　暮らしの豊かさや身分の高い人の意向よりも、楽器や楽の道に心を打ちこむことを何よりも大切にし、ほかのことは気にかけない姿。
う　貧しさにたえかねて、楽器や楽の才能を生かし、身分の高い人から援助を受けることで、なんとか暮らしを立てようとしている姿。
え　楽器や楽に打ちこむあまり、まわりの人に迷惑をかけてしまったことを深く反省して、人前ではひかえめにふるまおうとしている姿。
お　身分の高い人の呼び出しや命令には必ずしたがい、そのうえで、残りの時間のすべてを楽器や楽の道にささげようとしている姿。

解答（答えと短い解き方）

第5講　古文　説話・随筆の読み方と知識

要点1の確かめ

問一 う

「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語（おっしゃる）で、話す人を高める。

問二 え

「流れ／は／絶え／ず／して」と分ける。名詞・助詞・動詞・助動詞（打消）・助詞。

要点2の確かめ

問一 い・え（順不同）

『十訓抄』『発心集』は鎌倉時代の説話集。「時代」と「ジャンル」の両方を確かめる。

問二 （1）九月　（2）滋賀県

（1）長月は九月。（2）近江は今の滋賀県。

例題の確かめ

問一 あ

会話のあとの「とて」でつながるので、話し手と同じ中納言（隆家）。「給ふ」（尊敬語）がついている。

問二 う

「かたはらいたき事のうちに入れつべけれど」「ひとつな落しそといへば」「いかがはせむ」と続く。

練習　古文（入試の形）

問一 え

「さらに～ず」は「少しも～ない」、「いたむ」は「気にする」。今のことばの「さらに」と読まない。

問二 い

「などかは」は「どうして」、「のたまはせ」は「言ふ」の尊敬語。未然形につく「ぬ」は打消。

問三 い

「これを尋ぬれば」の主語は頼清。「深く望み申すべきこと侍り」と言われ、領地などを望むのだろうと思った。

問四 漢竹の笛

永秀のことば「漢竹の笛のこと、……一つ召して給はらん」から。頼清が予想した領地ではない。

問五 お

漢竹の笛だけを望み、ほかの御用は「それはこと欠け侍らず」と断ったので、「げに、数寄者にこそ」と思った。

問六 ㋐ようよう　㋑あわれ

㋐「やう」→「よう」を二回（「しだいに」の意味）。㋑語の頭以外の「は」→「わ」。

問七 お

「漢竹」は中国から渡ってきた竹。中国に近い九州（筑紫）の領地なら手に入れやすい。

問八 う

主語で見分ける。A：話し手自身→意志。B：頼清が永秀のことを予想→推量。C：話し手自身→意志。

問九 お

「年ごろ／え／まうけ／侍ら／ず」。「え～ず」は「～できない」の形で使う副詞。

問十 Ⅰ　あ　Ⅱ　あ　Ⅲ　い　Ⅳ　い

Ⅲ：「それはこと欠け侍らず」と断っている（本文と逆）。Ⅳ：名人になったのは笛を手に入れたあと（順序のまちがい）。

問十一 （1）鴨長明　（2）い・え（順不同）

（1）『方丈記』『発心集』の作者は鴨長明。（2）『宇治拾遺物語』『古今著聞集』は鎌倉時代の説話集。

確認テスト

問一 （1）おかし　（2）まいる　（3）ちょうど　（4）いうよう　（各5点）

（1）「を」→「お」。（2）「ゐ」→「い」。（3）「てう」→「ちょう」。（4）「ふ」→「う」、「やう」→「よう」。

問二 （1）三月　（2）六月　（3）十月　（各5点）

弥生は三月、水無月は六月、神無月は十月。「無」の字につられない。

問三 （1）あ　（2）う　（各5点）

（1）河内は今の大阪府の東部。（2）大和は今の奈良県。

問四 い　（10点）

「咲か」は未然形なので、そのあとの「ぬ」は打消。連用形につく「ぬ」は完了。上の語の形で見分ける。

問五 う　（10点）

空のようすから「今夜はきっと雨が降るだろう」と予想しているので推量。

問六 清少納言 （5点）

『枕草子』は平安時代の随筆で、作者は清少納言。

問七 あ （10点）

『平家物語』は鎌倉時代の軍記物語。ジャンルがちがっても、時代が同じなら答えになる。

問八 え （10点）

「げに」は「本当に・なるほど」。練習の「げに、数寄者にこそ」で使われていた。

問九 あ （10点）

「奉る」は「与ふ」の謙譲語（差し上げる）で、受け取る人を高める。

入試にチャレンジ

問一 え

「同じ声に裏頭楽を唱歌にしけるが、おもしろく覚えけるほどに」。夢中になっていたのは楽。

問二 （1）い （2）あ （3）う

（1）「御使、至りて」と主語が書かれている。（2）「～言ふに」の「に」のあとで主語が変わる。

問三 い

すぐあとの「行きてもえ聞かぬこと」が理由。二人の楽を、自分は出かけて行って聞くこともできない。

問四 お

予想（おとがめ）と、実際（「いとあはれなる者どもかな」とほめて涙ぐむ）がちがったことが「思ひの外」。

問五 う

a：「え～ぬ」の形で、未然形につく打消。b：連用形「なり」につく完了（強め）の「ぬ」。

問六 い

永秀も時光たちも、暮らしや身分の高い人の意向より楽の道を大切にしている。

くわしい解き方は創心館出版の攻略テキスト（別冊解答）に載っています。

古文の本文の一部は、やたがらすナビ（https://yatanavi.org/）の次の校訂本文をもとに、表記を改め、一部を省くなどして使っています。
中川聡／Satoshi Nakagawa『発心集』https://yatanavi.org/text/hosshinju/index.html（CC BY-SA 4.0）
これを改めた古文の本文（注・問題・解説はふくみません）は、同じCC BY-SA 4.0 で提供します。
CC BY-SA 4.0 の内容：https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja